

アドラー心理学の定義をめぐって 国際アドラー心理学会科学委員会ドイツ語圏小委員会

野田俊作（大阪） 訳

要旨

キーワード：

1982年7月、ウィーンで開催された第15回国際アドラー心理学会総会において、国際アドラー心理学会会長ワルター・シュピールは、科学委員会の設置を提案しました。この提案は承認され、ハインツ・アンスバッハーを委員長に選出して、科学委員会が発足しました。アンスバッハー委員長は、委員会の最初の仕事として、アドラー心理学を公式の形で定義する作業を提案しました。この提案を受けて副委員長は、地域別の小委員会を設置して、この問題を検討することを決定しました。こうして、地域別に小委員会がもうけられ、各々が別個に討議を重ねた上で、科学委員会に対して最終報告を提出することになりました。アドラー心理学の定義問題に関する最終結論は、1985年のモンリオールにおける第16回総会において出される予定になっておりました。しかし、モンリオールでの討議は、結局、最終的な意見の一致を見るまでには致らず、最終結論は、1987年ミュンスターにおいて開催予定の、第17回総会に持ちこされることになりました。

さて、現在、北アメリカ、南および西ヨーロッパ、中央ヨーロッパの、三つの地域小委員会が活動しております。この内、われわれの分担である中央ヨーロッパ小委員会は、実質的には、ドイツ語圏のアドレリアンで構成されております。以下にドイツ語圏の小委員会の最終報告を提示いたします。なお、この小委員会は7名の委員から構成されており、3つの小委員会中で最大のものであります。

われわれのドイツ語圏小委員会のメンバーは、まず、相互間に活発な文通をおこない、意見を交換しました。ついで、その活動は、ドイツ・アドラー心理学会の科学分科会において総括され、そこでアドラー心理学の定義問題が詳細にわたって討論されました、以下に紹介しますのは、このようにして得られた結論を要約したものです。

1-1 理論システムとしてのアドラー心理学

まず問題になるのは、アドラー心理学は非常に広範な理論体系であるということです。所与の心理学理論をアドラー心理学であると認めてもよい範囲はどこまでなのか、その判断基準となるものは何であるのかを決めておかなければなりません。そのためには、アドラー心理学の諸前提を正確な用語でもって表現しておく必要があります。そのためには、まず、他の心理諸理論を参

照し、その中でのアドラー心理学の位置を明確にしておかなければなりません。

結論だけを述べますと、一般心理学と比較して、アドラー心理学に特徴的といえる考えかたは以下のようなものでしょう。まず、アドラー心理学は、個人の目標追求の運動を明らかにしようとし、その個人の諸活動を主観的に体験された弱さへの戦いと克服（補償）としてとらえようとします。また、アドラー心理学は、個人の非分割性と全体性とに基礎をおいており、人格を、たとえば、本能的衝動とか性格特性とか認知機能とかいうような部分に分けて見ることに反対します。アドラー心理学は、主観的に選択された（仮想的）目標に向かう、個人の創造的な力に関心を持ちます（目的論）。アドラー心理学は、社会的な因子（社会的相互作用・共同体感覚）を強調します。アドラー心理学は、社会心理学的な方向づけを持っており、この点では、人間学的心理学と類似点を持っています、さらに、アドラー心理学は、（生理学的・心理学的・社会的な統一体としての）個人が、また環境と分かちがたく相互に関係しあっているということを仮定します。すなわち、（物質的・主観的あるいは社会的）状況との関係を無視して、個人を孤立的にとらえることを拒否します。最後に、アドラー心理学は、「人間学的楽観主義」を強調します。

1-2 研究方法としてのアドラー心理学

アドラー心理学の研究方法は、個人の行動の文脈を比較検討することによって、その個人の運動の全体的システム（ライフスタイル）を、所与のデータから仮説的に集約しようとするところに特徴があります。その方法論的な側面についていえば、（分析帰納的などという意味での）経験的な、あるいは（実践的な）解釈学的手続きが主流になっています。このようなわけで、アドラー心理学は、観察と記述、臨床ならびに実地研究、および伝記ならびに文化的接近などの研究方法を用います。ある委員は、アドラー心理学のメタ理論的な矛盾の危険を指摘しております。それは文脈主義（実践主義）と有機体モデル（絶対的観念論）との矛盾です。たの実例は、たとえば、ライフスタイルの統一性についての議論、葛藤の概念、あるいは、目標志向性と合目的性との混同などにあらわれています。いずれにせよ、アドラー心理学の文脈的要素の強調は、一般心理学や発達心理学の諸理論をアドラー心理学の立場から再構成するために重要です。

1-3 心理医学的治療法としてのアドラー心理学

アドラー心理学は、個人の人格発達の初期の葛藤に由来する、個人の精神緊張や人生の運動の異常を修正することを目的とします。治療的には、人格発達の初期の葛藤を意識化させ、責任性と自己決定性ともとづく人生を可能にすることをめざしています。治療的退行と転移の分析の問題は、委員の間で議論になりましたが、治療の過程において、治療的人間関係の枠組みの中で、幼少期の苦悩と実存的脅威との結果を、情動的に修正する可能性を患者に与えるべきだという点では、意見の一致をみております。

幼少期の陰性の体験は、いわゆる精神障害の準備状態であるとみなすことができます。そのような準備状態とは、侮辱されたり挫折させられたりした体験であり、主観的な劣等感に対応する、準客観的な外的原因となります。この準備状態から、安全への誇張された欲求が生じると考えられます。この点で、アドラー心理学は、フロイト心理学や来談者中心療法などの、さまざまな受容的・非指示的手続きとも共通しています。

1-4 教育心理学としてのアドラー心理学

アドラー心理学は、教育的なカウンセリングにおいても学校教育においても、勇気づけが最も有効な手段であることを、アドラー自身がウイーンで開設した児童相談所における初期の活動以来、歴史的に証明し続けてきました。疑いもなく、1-3でのべた非指示的な治療の手續きと、ここでの指示的な教育的手續きの伝統とは、異なったものです。これは、規範的・倫理的な価値と原理とを伝達することが教育の目的と考えられているからです。治療的な活動とは異なって、個人を「共同生活の鉄則」としての規範に適合させるという意味で修正することが教育の目的であるからです。この場合には、われわれは、体験的・情動的な態度の変容にはかかわりを持たず、合理的・認知的な洞察に第一義的にかかわりを持ちます。従って、教育的な手續きは、もっぱら意識の領域にのみ関係しています。

2-1 深層心理学としてのアドラー心理学

アドラー心理学は、心理学の目標を、観察できることだけに限局することを拒否し、意識と無意識との間の矛盾を認識することをめざします。この矛盾は、主観的な手續きによって帰納されます。1920年代中ごろ以後のアドラー心理学は、相当程度、深層心理学化したといえましょう。これは全体論の概念にもとづく、無批判でナイーブな治療の結果への反省に由来する軌道修正です。全体性というのは、単極性を意味するのではなく、反対のものを弁証法的統一体としてとらえることを意味します。特にアドラー心理学は、初期からライフスタイルにおける個人的／主観的な要素と、社会的／間主観的な要素との間の葛藤を取り扱ってきました。このことからわれわれは、現実と空想、協力と利己主義の対立を推論することができます。ライフスタイルの要素の内、社会的な枠組みの中で言語に媒介されて形成された文化的な要素は、幼少期の非言語的体験にもとづく個人的な要素よりも、より意識的な性質のもので、それ故アドラー心理学は、一貫して、意識的活動と無意識的欲求との対立を、弁証法的な対立関係として受容します。

他の深層心理学との主な相異点は、他の心理学は、実証主義・客観主義的立場をとっているのに対して、アドラー心理学は、そのような還元論的アプローチを断念し、現象学的（場の理論的・有機論的・主観主義的）アプローチをとる点にあります。アドラー的深層心理学は、それ故、人生におけるあらゆる運動は、主観的な過程（態度・意見）によって決定され、しかもそれらは初期の幼少期体験にもとづいている（柔らかい決定論）と考えます。個人の人生には、一貫性のある特異的な行動の構造、すなわち、ライフスタイルが存在します。ライフスタイルは、部分的には意識的で部分的には無意識的なものであると考えられます。

2-2 アドラー心理学の未来

アドラー心理学の未来は、その表現形態をいかに正確なものに改善するかにかかっています。別の言葉でいえば、われわれは、この何十年間の心理学の進歩を参照しなければなりません。技術としてのアドラー心理学の未来は、より一層の特異的技法の開発にかかっています。

このレポートは、1985年のモントリオールにおける国際アドラー心理学会総会に提出されたものである。ドイツ語圏におけるアドラー心理学理解は、英語圏のものとはかなり違うことがおわかりになる。

私は個人的には、ドイツ式のアドラー心理学理解は気に入らない。特に、「心理学的治療法としてのアドラー心理学」と「深層心理学としてのアドラー心理学」の項は、フロイト心理学への退行であるように思える。アメリカのアドレリアンたちも、このレポートには驚いたようで、その後活発な議論がおこなわれている。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載